勢山文書 ⑥「おさしづ」の写し翻刻

おやさと研究所員
安井　幹夫　*Mikio Yasui*

（4）―（タ）の続き
むかつて人間とゆう者をこしらへよふとて　里よふが国とこたち　国を見定メたゆへ　国常立の尊とも　国見定の尊とも里よふハ水ふく　じやハ火をふく　水と火との世界や　天ハ里よりなり　地ハぢやなり　天ハ水ふかき故　あをくみへる　水のふかきを見れバ　あをふみへる　里ようハ夜の守り　夜ハよつ由ふる　ひるハじやなり　しやハ火をふくなり　地ハじやゆへ下ほど熱くみがあるなり　又おゝくの子数ハ九おく九まん九せん九百九十九人の人数を三日三夜さに　一時につゝきこみ　お同く子供一時につゞきこんた故　此里お御月様といふ　又日様の方ハ子」（13 オ）
かずやとりこみ　身がおもくなりたるによつて　面足の尊といふ　又三年三月　天の岩戸にとゝまりいた　其時にりん〳〵とたいないへ里をます　此里によつて日里ん様といふ
(注)「こふき話」あるいは「別席のお話」の一部であろうか。

（チ）明治二十一年十一月廿一日　旧十月十八日
さあ〳〵どふせいこふせいわ　ゆわんで〳〵　さあ〳〵おゝほふの心　皆世界おふほふの理をいて　是一たんですすむと思うなよ〳〵　また〳〵神の道がある　一れつすます〳〵里があります〳〵しはらく〳〵長いと思うな　はやて一度つくしたるミなでける年」（13 ウ）
々にしゆん〳〵道がある　どふでもしやんもつかん〳〵　わずか一日の日を見て、わづかのあいたでてける　是から何かの処はやいで
(注)明治 21 年 11 月 21 日（陰暦 10 月 18 日）「教会本部開筵式三日のつとめ致しますものか、又は一日だけに致しまして宜しきや伺」 正冊と対照するとき、かなりの脱落が見られる。

（リ）明治二十一年十一月廿日夜九時
さあ〳〵じゆん〳〵刻限〳〵　さあ〳〵きかねハならんで　でた咄ハでたであろふ〳〵　また〳〵聞ておけ　皆〳〵一ツ〳〵の里もわかるであろふ　今の処世界一ツの道〳〵　今の処一ツの道である　壱度の咄しようかい　一ツの理めづらし　一ツのだいはなし　いまの〳〵でハあるまい　ながらへて一ツの処年限ある　なからへて」（14 オ）
とふりた一ツの道である　此処の理を一ツしやんせ〳〵　此処わかき〳〵ふるきのもの　一ツの理がわかき処の一ツの理〳〵まんそく〳〵　一ツの里もあろふ〳〵　だん〳〵の一ツの心もおさめにやならん　おまへたれがいふやない〳〵　此処一ツからや〳〵　よふ聞わけ　今の道古き道から今の道　さとりまちかへハせひハない〳〵　思うて一ツがちうよふ〳〵（14 ウ）
(注)正冊をみていくとき、おそらく「明治 21 年 11 月 23 日午後 9 時　刻限御話」であろう。それと対照すると、脱落、間違い多し。とくに最後の一節は「よう思うて一つの事情〳〵」である。
ナンバー（4）はこれで終わり。

（5）表題「御刻限」
（ア）明治廿八年旧八月廿日午前八時
さあ〳〵　これ〳〵　こんやといふ　今やで　すつきりしたさしづ　どんな事もさしづ通りもちいらねバならん　どういふさしづするなら　日々せわしい　いそがしいといふハどういふ処からいそがしなる　みんなでゝくる　まんぞくあたへる　まんぞくの里であれども　此里がわからん　たぶんの人がいりこむ〳〵　これからなんぼいりこむやらしれん　どこからでゝくるやらわからん　世上にてハそふじをしかけた　どこからどういふ」（1 オ）
ものがでゝくるやらわからん〳〵さきからしらする　ありてからさとするやない　さしづ通り皆なりてくる　あら〳〵わかりてある　おふぼふのよふなもの　是からにち〳〵日がたてバどういふ事もはこばにやならん　むつかしい事一寸はなしかけるなにほど身にさわり〳〵　いく〳〵〳〵　なんぼふさしづしたとて　さしづハ其場かぎり　どうしたらよかろふ　こふしたらよかろふとゆへバ　皆そのまゝなれど　指図なくてもかつてだけハよふでける　さしづ通りでけん　さしづ通りできたる事もある　できてもふしよぶしよだらけ　あちらはらたて　こちら」（1 ウ）
はらたて　一ツの里におさまらん　たがい〳〵の心さい　みんなはなしあふなら　一ツの里に納まる　此道ハおれが〳〵といふても皆神の道　神がはたらけバこそ　にち〳〵の道がある　それハむつかしきことはじめかける　年限〳〵どういふ年限たつた者でなけねバよふぼくにつかわれよふまい　年限たゝぬものハよふぼくにハならぬ　年限のたつたものハない　よふぼくといへばふしんなんぼふ　どれだけきれいといふても　わかきものやほそいものでハもたん　年限たつたものなら　なんぼふふしがありても　いがんでありてもこたゑる　おもりがこたゑやで〳〵（2 オ）
そんならほそいものハまにあわんといふ　年げんそふだけにまにあふ　年限のふるいよふぼくばかりでもそろわん　あと〳〵たらん処ハ年限まつよりほかハない　年限をたつたならこそよふぼくといふ　よふぼくなにほどいらつてもいかん　そこでこれどうしよふ　こふしよふと　めゑ〳〵のまゝの〳〵よふでハ世界のまゝにいかん　どうしたとても　でけんものならできやせん　じつとしていても　でけるものならでける　どうしてくれとも　こふしてくれともゆわん　ことば一ツがよふぼくのちからなら　どうする事も　もどす事もでけん」（2 ウ）
みんなそれにもたれバわかきがそだつ　せかいなんぼふそだつともわからん　そふしたらどんな事でもこわい道ハない　これからせいて〳〵　どこ迄せくやらわからん　せかいにあたらしき道がせんすじもある　できてきた　どんなよふぼくでけるやらわからん　あちらの国からよふぼく　たにぞこにてもある　ひくい処からひきだすにハ引出しにくい　たかい処からひきだせバはやい〳〵　する〳〵とおりてくる　どんなよふぼくよせて　どんなしごとするやらわからん　ちいさき心やめてくれほしい　おしい　うらみ心ハやめてくれ　そこで」（3 オ）
せき一ツの里をよふ聞訳てくれ　一寸一ツの心だけはなしておく
(注) 明治 28 年 10 月 7 日　夜 10 時　御刻限。正冊と対照するとき、かなりの語句が脱落している。時刻も午前 8 時となっているが、夜 10 時である。